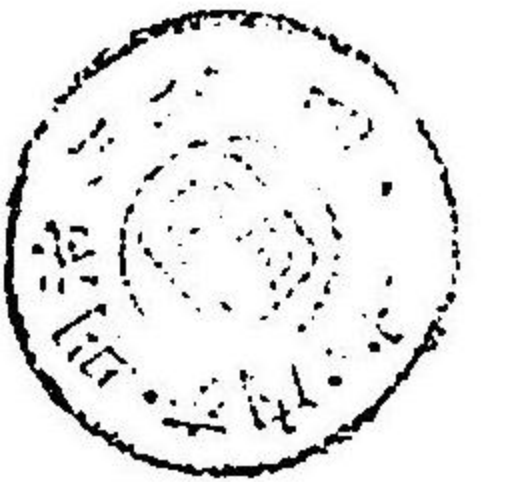


言解
如左
田
孔
古
語

特52
24



紀伊國伊都郡
九度山村大字
真田氏旧跡
著名稱院之圖



眞田の古跡

○眞言宗金剛峯寺末 法羅陀山善名稱院

紀伊國伊都郡九度山村大字九度山

○本尊地藏菩薩

本堂に安置す

○鎮守社

地主大権現稻荷大明神金毘羅大権現天滿天神住吉大神

○眞田安房守墓

小竇箇印塔幸々の建立

○同

碑有志者協力して建立せり其文下の如し

正面「眞

田昌幸公之

碑裏面鎮守神社再管靈碑及石柵構造發起者播

磨國南光坊

往職廣澤堂興當九度山村美濃部庄兵衛、松山常

治、小澤龜右

衛門、保脇彌七、岡久兵衛、松山爲助、諏訪八郎」左側

明治廿三年

三月建設「右側「韜畧傳家秘、將門奕世雄、風雲何所

感、晦跡此庵

中、不應霸王聘、不求隣閣功、一片報國志、教兒斑西

東、爾來三百歲、岡村長所崇、鬱々祠上樹、蒼龍嘯晚風、

東海漕浦隱士看翁書碑

面併誌數字

○地像尊、石像

小像厨子に安す是は幸付大坂入城の時自身に代りて父の墓所を守るが爲其傍に建立する所なり

○大安上人、廟

當院開基の大徳也

○土砂堂

彌勒菩薩を本尊とす大安上人建立して加持せし土砂を納む

○加持水 大安上人の堀所の井なり

○真田、松 墓側にあり數百年を経たる老木樹なり

限りては岩根にたふる苔衣幾代かさねむ庭の老松 七十志道

雲まつと潜みと龍のいろくづを猶忍ばする松の一本 七歳 眞琴

武士の鑑とや見む霜にだにをれず立る松枝の月 同

○什寶 幕 安房守の 船幕なり 鑑 幸川水練に 川かし物也 木製、犬 安房守の息女お市の方 幼少の時の御弄物安房

守の 楠公、位牌 開基上人は楠家遺臣の 寄れば細らしなり 同印形 馬を彫れり是楠公の生歳午なるが故

思ひきや松をとひ來て橋のさらけを忍ぶべしとは 塙柳

○真田、淵 紀の川にあり幸利毎に水練を試みし所なり古來此川出水 多くして淵瀬の變極りなしと雖ども此淵のみは依然たり

雲を起し浪まく龍も時待ととばしは淵に身を潜けん 眞琴

○真田、板穴 紀の川の支流丹生川の東崖にあり巖穴空洞にして自然に成れるが如し此より紀の川へ凡七八丁地下を穿ちて通すといふ

善名稱院は、真田氏の舊跡也、其由來を尋ぬるに、真田安房守昌幸は、信州上田の城主にして、其先 清和天皇の皇子貞元親王

より出、父彈正忠幸隆に至て。甲州の武田家に屬し智謀を以て世に顯る、彈正入道して。一德齋と號し、天正二年五月十九日卒す、長男源太左衛門信綱、次男兵部丞昌輝は、長祿の役に戦死し、三男安房守家督を續けり、安房守亦智謀拔群を以て稱せらる、其の彈正の世より武田家の爲めに戦功を立てしこと枚擧に堪へず信玄卒し。勝頼の世となりて。跡部長坂等の佞奸、君を蠱惑し。國を擾し。忠言渾て壅蔽して。智謀を施すに地なし、されば織田徳川氏等の爲に。漸く四境を蹙められ遂に大將勝頼據る方もなき迄に窘迫せられたり、時に小山田義國勝頼を執へて織田家に市んと欲し、其邑岩殿に入んとを勸む、安房守之を危み吾邑吾妻に迎へて籠城し死を以て守らんと請ふ、二龍 跡部長坂の曰はく、真田は新附、小山田は舊臣也、舊を捨てて新に依るの

理なるとして。岩殿に入んとす、小山田忽ち反旗を翻し、銃を發して逆へ撃つ、是に於て進退窮り、終に天目山に入り、嫡子信勝等と四十人悉く戦死し、武田家全く滅亡せり、殘黨或は降り、或は誅せられけるに獨、安房守は居城に據て大敵に抗し。孤軍を以て能く守る、次男與三郎後左衛門幸村此時十三歳、屢々奇計を以て敵を惱せり、後織田氏と和し、羽柴秀吉に深く結托す、秀吉殊に與三郎の奇才を愛して厚遇す、天正十七年關白秀吉公。北條家不延の罪を征さんと欲し、諸將を會して軍議し、地圖を開て其の向ふ所を部署す、此時安房守末席にありければ。地圖を窺ふことを得ず口を閉ぢて扣へたり、忽ち豊公安房守を呼て曰はく此度の征討、海道の先鋒は家康に命じ山道の先鋒は汝に命すと諸將相見て茫然たり安房守大に感喜し、私に謂て曰

はく殿下の一言、我れに於て百万石の封を得とよりも榮とすと、是れ平生徳川公とは其中善からず、然るに徳川公は豊臣家の客將にして諸侯の上班に在り、加之大國の諸家濟々として數多あるを措て末席より拔擢せられ彼の徳川氏と力を競ふことと許されたれば也、實に武道の一大快事と謂ふへし、翌年大軍の東征するや、山道の先鋒として諸城を陥れ、軍功最も多し、慶長五年上杉中納言謀を石田三成に通じ、會津に反旗を立つるや、徳川内大臣怒て天下に令し、諸將を驅て東征す、安房守亦一族を率ゐて出發し、徳川公に會津に會せんと欲して大山に至る、時に三成等秀頼公の命を以て諸侯を集め、兵を擧げて遙に上杉氏に應じ、狹て家康公を撃たんとす、因て檄を飛ばして安房守を招く、是に於て安房守子弟に各其意見を問ふ、嫡子

伊豆守信幸、及弟隱岐守信尹の曰はく、吾等關東の殊遇を受く。願はくは東して徳川公に従はん、二男左衛門佐幸村の曰はく、太閤の舊誼背くべからず、寧ろ西して亡ぶるも、東して活るとを欲せずと、安房守の曰はく、東せんと欲する者は東せよ、西せんと欲する者は西せよ、而して吾は西に従はんとして是より父子兄弟東西に別れて吳越となる、徳川氏平生伊豆守等を寵遇し、本多忠勝の女を養ふて我が子とし、之を伊豆守に妻せり、是を以て其の東に従ふや亦理あり、又安房守等は太閤の恩義を重んじ、此の度の擧たる、縦ひ石田等の私心に起りしにせよ、苟も秀頼公の奉書を以て徴されしものぞ、之に背て關東に與し、反て弓を大坂に彎くの義は有るへからず、且つ此の擧たる。豊臣家に利ならざるも、事茲に至れば復た己へからず、利害は今

更問ふに違あらず、唯義に是れ従ふのみ、彼の徳川氏の狡手段に籠絡せられて、刃を舊主に向け功名に誇るの徒と、霄壤果して幾何ぞや、擬安房守は左衛門佐と上田に歸り、城に據て東軍を妨げんと待ち構ふ、徳川公は小將秀康卿を以て上杉の押へに留めて江戸に歸り、山道の大將として、中納言秀忠卿に、榊原康政、本田正信、大久保忠隣、酒井忠利、眞田信尹、同信幸、等を附し。三万餘騎を以て先づ發せしむ、八月廿四日秀忠卿諸軍を率ゐて下野を發し、九月二日小室に至る、然るに上田には籠城して途を塞ぎければ、秀忠卿伊豆守に命じ、安房守を説て招かしむ、安房守聽かず、東軍怒て、城を打破て通らんとし、急に攻かゝる、城中千二百餘騎、能く防ぎ、寄手利あらず、左衛門佐奇謀百出、散々に寄手を破り、大に惱せり、秀忠卿大に心をいらち、かくて日

を嘯うし、若し上方の戦に後れなば、實に一大事也。且つかばか
りの小城に此の大軍を支られ、何の面目有て海道の諸將を見
ん、今は悉く戦死するとも。猶豫すへき時に非ずとて、殊死して
攻むれども、城中泰然として動する色なく、却て東軍殺傷を増
すのみ、或は途を替へて進まんといふ者あれども、秀忠卿、途を
替ふるは耻辱なりとて聽かず、されといつ果べくも非ざれば、
終に其説に従ひ、仙石秀久、森忠政、を押へとして留め、途を替へ
て西上せり、時に家康公、九月朔日江戸を發して海道より上り、
十一日河洲に至り軍を止めて山道の軍を待合せとも。來らざ
ると以て、家康公意を決して進み、十五日關ヶ原に於て西軍と
會し、大に戦ふ、小早川秀秋等、戦を倒して西軍を衝に依て西
軍崩れ立ち、終に大に敗績せり、尋で諸城を陥いれて東軍凱歌

を奏し、家康公大津に留りて殘務を處置し、將に上洛せんとす
此時秀忠卿漸く着す、かく期を失せしを以て、家康公大に怒り
見ゆるとを許さず。秀忠卿涙を垂れて出づ、

木曾路こうけはしかりけれ武士の道に後れん我ならなくに 眞琴

榊原本多酒井大久保等、亦た見ぬんとを願へども、皆許されず
諸侯種々に陳謝して、漸くに聽されたり。うれ關ヶ原の役や、眞
田氏一手を以て、東軍の片腕を執へしなり、かくして西軍に勝
を恣にせしめんとせしかども、奈何せん西軍は、石田の猿智慧
自ら謀主を氣取て我意を張りければ、諸將一致せず、大軍なり
と雖ども、既に天の時、地の利、人の利、皆之を失せり、其の敗る、
や怪むに足らず、扱て上田に在ては、西軍既に敗れし上は、誰が
爲に守らん、暫く潜で天下の動靜を觀、時を待て爲す所あらん

と一決し、隱岐守伊豆守に依て城を渡り、兵士を散じ。一族を率
ゐ、股肱の臣數輩を従へて、紀州高野山に遁れ來り、時に十月
九日なり、(高野山蓮華定院は眞田氏の菩提所なれば)乃ち三里麓、九度山村
に草廬を構たてで閑居す、其邸地は即ち今の善名稱院是れ也、穴山
等股肱の臣は別に住居す其家系今猶はあり又安房守の夫人は一里許りを隔てし丁之町に
住す今平岡氏とて其舊跡あり想ふに一族處々に散居して可成人の目に觸れざる計をなせ
し者ならむ又當地に松山又兵衛と云ふ家今在り眞田氏當地に若
せし時先づ此家に落ち付きしなり福島正則よりの書狀を藏す 此年 或は翌年 左衛門
佐一子大助生る、爾來左衛門佐家僕と共に野に出で、耕し、又
は木綿の絲もて紐を組て生活を資く、其紐後世眞田紐と稱し
今に需用多く、かく生計に餘念なき躰を示し、は禍に遠ざか
るの遠慮なり、然して夜は孤燈を挑たきげて韜略たうりやくに眼まなこを曝さらし、時に
天象てんしやうを觀みて時運を推し、或は野馬に跨またり紀川に鞭むちて水練を試
み、眞田淵あり若くば火器 帖貫の大礮と工夫して豫あらかじめ軍用に備ふる等
又鉦あり 銅連花等

用意最も周密なり、蓋し當時吾が邦未だ大礮たいたうの製及び地雷火
の術を知らず、然るに左衛門佐之を發明せり、是を以て視れば
唯軍略の才に長せしのみならず、能く物理の極微を窮めし深
智と著へしこと知るべし、

打出でん時をまつし間の空眠りあはれいかなる夢結ぶらん

太田尊信

かくて年月を過ぐし、が同十六年安房守病に罹り漸くそとに革
也、左衛門佐帶を解とかずして看護し、醫藥を盡くし祈禱を竭くし
けれども其効なく、六月四日終に卒す、左衛門佐悲哀限りなく
追孝生るが如し、法名を一翁いこう于雪大居士と號す、是れ安房守豫て
日菩提所高野山蓮華定院に自ら逆修とし遺骸は邸内に葬れり、即ち今
て夫人と偕に位牌を建立せし法名なり 遺骸は邸内に葬れり、即ち今
の墓所是れ也、扱孝子の喪に在る、駒うまの隙ひまを過るが如く早や小
祥大祥の忌も過ぎ、十八年の比に至れば時勢漸く迫り天下の

風雲隠ならず、國主淺野但馬守は初めより關東の内命を受け
 偵吏をして終始其動靜を窺はしめ遂に刺客を遣して暗殺せ
 んとす、刺客反て大助に捕へられけるに眞田父子の仁智に感
 じて心服せしと云ふ、同十九年右大臣秀頼公大坂に兵を擧ぐ
 るや、奉書を以て聘すること慇懃なり夫蚊龍時に蟄すと雖ど
 も豈終に池中の物ならん、決然起て舊臣を招集す、檄に應じて
 子來する者百五十餘人、皆一騎當千の驍勇にして左衛門佐の
 爲には皆死せんことを願ふ烈士也、平素仁愛惻怛の深きに非ず
 んば焉ぞ能く茲に至らん、又高野領の地士にして當郷及近在
 に住する者、風を望て馳集る、奥出羽守、同彌兵衛、中橋勘之允、高
 坊常敏、喜多源助、山本角左衛門、田所庄右衛門、平野八郎右衛門
 尉、城孫右衛門、中勝之助、龜岡師、等百五十四人、又高野山五大院

刑部、智莊嚴院應政

此兩僧は木村良門守に
 属し若江にて戦死せり

合せて三百餘人を得たり

り、此時所持せし田園器財等悉く村民に分ち與へしといふ皆勇氣勃々白晝隊伍を作して九度山

を發し大坂城に入る、紀見越國主及び沿道の領主等敢て拒む者

なく手を束ねて傍觀せり、德川公平生兵田氏の大坂に入らんと深く

す其兄伊豆守に命じ密に説て徳川家に仕へしめんをせしかども病を辭して

固辭しければ伊豆守然らばせめては大助を取立んと勸むれども是れ亦た出

家せしむる所存なりなど偽りて謝絶したり伊豆守もよ大坂には淀君淫

もや同胞の間に詐言も有るまじとて空しく還れり

縦にして大野治長之に媚附して柄を執り、秀頼公は有れども

無きも如く、文武の政令壹に此の淫婦奸臣より出で忠言渾て

防遏せられければ、數萬の兵ありと雖も是れ數萬の心にして

更に一和せず、金城湯池ありと雖とも、貳心の者多くして大患

蕭牆の内にあり、かく累卵よりも危き城中に左衛門佐の入り

しは、或は成敗の機に暗きも如く見ゆれども決して然るに非

す危ふければこゝろ入りたるなれ

浪華瀉沈まん影と知りつ、も高野の山を出でし月哉

小出 繁

若し左衛門佐にして一身を圖らば夙に關東に従ふて封侯を得ん封侯我れに於て何かあらん、唯義富嶽よりも重し、是を以て一身塵芥よりも軽く、虚名只人の評に任せんのみ、實に危きを見て命を授くとは此の公の謂なり、されば斗符の輩の約束を受るとを喜まず、本城第一の衝に當る玉造の阜に別に砦を築きて偃月城と名け之に居る、世之を眞田の出丸と稱す、東西の二門を開て信州の遺民を募りけるに舊恩を懐ふて慕ひ來る者又百五十餘人あり、乃ち秀頼公より附せられし伊木遠雄山川賢信、北川宣勝等五十人を合せて之を守り、

來ん春は花さかせんと蘆散る難波大城に冬籠りけん

藤尾秀成

先づ策を建て曰はく、徳川氏天下の兵を檄して來り攻めんとす、坐して之を待てば勝算なし、今や關東北國の兵強半は未だ至らず、此の時を以て秀頼公天王寺に出陣し玉ひ、森勝永と臣を以て先鋒として山崎に赴き、長曾我部盛親、後藤基次、を大和路に出して宇治橋を掘り伏見を攻め抜き、京師に火を縱て大に天下の通路を關ぐべし、然らば西國の諸侯必ず來り屬する者あるへしと、淀君大野等危懼して用ひず夫れ小を以て大に敵と寡を以て衆に勝たんとするには何ぞ力を較して能はんや是れ楠公の敵を京師に縱て糧道を絶んとせしと、事は異なるれども其の歸は一也、此の妙計を拒んで用ひざりしは千古の遺憾限りなし、左衛門佐又後藤と共に建議すらく、徳川將軍不日天王寺に至るべし、其未だ陣を布かざる間に敵軍を襲は

必ず克んと、必勝の計を勸むれども亦用ひられず、其の他明籌奇謀皆掣肘せられて更に驥足を展ばすことを得ず、かゝる程に天下の兵悉く著し、城の四外に陣を張る、其兵凡五十万野に益ち山に滿ち、數里の間、兵ならざるはなく、營ならざるはなく、いかなる金城鐵壁たりとも一日も耐へがたき形勢なり、左衛門佐かゝる大軍を視ること蟻の如く、出丸に據て防戦す、此の出丸は本城の咽喉に當れば敵を受ると尤も多し、皆奇計を以て之を摧き又は自製の大礮を以て之を碎き敵を討つと數を知らず、其の討つて出づるや、他の軍に眼を掛す家康公一人を狙ひ、殆んど公を獲んとして逸すると其の幾度なるや知るべからず、家康公落ち行く路に必ず伏兵あり、到る處眞田也と呼はりて公を追窮す、公叢澤に潜み、或は民舎に匿れ、九死に瀕

せしを、纔に大久保等に助けられて一生を得たり、されは六文錢の旗幟を見れば敵疑懼し戦はずして敗走するに至る、此役や叔父隱岐守信尹従ふて東軍に在り、家康公命じて左衛門佐を説き降さしむ、隱岐守出丸に至り而會して家康公の意を陳べ頻りに降を勸む、左衛門佐答へて曰はく、關が原の役、臣父子西軍に屬し寡兵を以て大軍に抗し、西軍の敗るゝに及て山野に遁れたり、然るに秀頼公、臣が陋劣を以てせず猶ほ數千の兵を授けて一面の將たらしめ玉ふ、是れ臣を知れば也、古に云ふ士は己れを知る者の爲めに死すと、臣死すとも負くと能はずとて叔父を返しけり、家康公再び遣して若降りなば信州を宛て行ふへしとて又勸むると切なり、左衛門佐曰はく、幸村一死秀頼公に報するの外を知らず、若し東西和平するの日には請

ふ叔父の許に寄食せん、縦ひ日本の半を賜はるとも、徳川公の命に従ふと能はず、叔父還て此由を述へ家康公に謝せられよ復た來り玉ふと勿れと、其志確乎不拔也、隱岐守又空しく還り今は家康公に謝する言なきとして、將に自殺せんとするを、公慰めて之を止めけり、凡う左衛門佐度々の合戦に毎に大敵を破ると固より奇計に因ると雖とも、抑も亦た穴山増田深谷三好等の股肱を始とし、以下輕卒に至る迄皆勇猛にして一人の義に背く者なく、全く一心となりて團結し、其進退己が四肢を使ふが如くなればなり、されば少數と雖も金鐵よりも堅く、其の銳鋒磐石と雖も破碎せずと云ふとなし、是れ豈訓練のみを以て能く此に至らんや、誠に仁徳に感して中心悦服すれば也、翌元和元年再び兵を擧ぐるや、城内大に戰備を議す、諸説紛々底

止する所なき、時に左衛門佐進て曰はく、今日の事兩言にして決せんのみ、戦ふべし守るへからざる也、急に京師を襲ひ、天子を狹て以て天下に令せんのみ、此の他に勝算あるとなしと、是れ今年は諸砦皆撤し、外濠悉く埋められ、筑方として牙城のみ孤立し、昨年とは其勢大に異りければ、又變に應じて此の大計を建てし也、然るに大野輩亦之を用ひず、坐して敵を待ち、終に滅亡を招くところ愚にも亦た残念の至りなりければ、其の戦を始むるや、左衛門佐大軍を破て家康公に迫ると數回、殊に平野の火攻は最も猛烈を極め、百雷地を裂て發し、炎々天を焦し、人馬悉く微塵に碎けて燒盡せり、家康公半身燒爛れて倒る、大久保彦左衛門抱て走り泥中に潜て纔に息を繋ぐ、一説に此時大御所既泥水の中に死骸を抱へ奈何ともすると能はず、茫然たりし所へ堤上一騎の來るあり、亦敵かと戰栗して潜みながらに窺ひければ、是れ仙臺の片倉小十郎

なりければ大に安堵し其實を告げ深く大御所の死を秘し味方にさへ漏さざりしと云ふ又一説に大御所眞田に追窮せられて進退窮まり大久保等葬輿に乘せて落行ける途に後藤來か、り怪しみて一鎗突込しことあり此時討れ玉ひしとも云ふか、る大變に遭ひながら東軍擾亂せずして終に凱歌を奏するに至りしは怪むべきとされども全く能く秘して洩さざりしに因るならんか、る例なきにしも非ず近くは天正元年正月武田信玄徳川家の野田城を攻めし其の勢當るべからず落城眼前にあり城中郵松某夜間城樓に上りて笛を吹きければ寄手數騎出で、城濠を隔て、之を聴き竿を立て去れり明旦城中より之を望み鳥居某密に彼竿を準と定め銃を据て夜に入るを待ち郵松又笛を吹く寄手果たして出で、聴く鳥居即ち銃を發しければ一騎を墜せり明日寄手より使を遣はし退城を論す城將菅沼定盈松平忠政等其終に守るべからざるを度り退城しけるに伏兵に遇ふて捕へられたり然るに信玄病と稱して歸陣する途中にて卒す是れ笛を聴て丸に中り其創を病て死に至りし也されど深く喪を秘し其弟趙遙軒信綱容貌信玄に肖たるを以て信玄と稱しければ敵國絶て知る者なし後一ヶ年計を経て甲斐の軍振はざるに依て敵國の推知する所なきなり夫れ四境皆敵國たる武田家さへ猶ほ斯くの如し況や天下を一統し威權千古其比なき徳川氏のとされば或は其説の實なりしや亦知るべからず猶ほ者證 夫れ左衛門佐の、雲霞の大軍には目も掛けずして獨り家康公を狙ふは、かの能登守が、義經と死を決せんとするの類に非ず、教經の義經に於けるは、只た冥途の土産に其首を携

へんと欲するに在るのみ左衛門佐は否らず、天下の諸侯大抵は皆豊臣家の舊恩あるもの也、而して今悉く敵となるは、唯た家康公一人の威望に屈する故のみ、因て公一人だに討ち取りなば、忽ち瓦崩して諸侯心を翻さんと必定也、是を以て片桐且元、遠謀を懷き唯無事を圖り、竊に公の命數を計りて彼の難題を甘じ、靜に時を待たんとせり、然るに淫婦奸臣等其深智を窺ふと能はず、家康公の詭謀に陥りて柱石たる片桐を逐ひ出だせり、扱又此の戦に及でや、左衛門佐の大計を用ひず、行くところ凶ならざるはなし、然れとも左衛門佐の才畧、能く變に應じて奇計湧出、猶ほ此の快戦をなす、其神智實に測るへからざる也、かくまで力を竭くして敵を破ると雖とも城内妖雲塞ちて更に瑞祥を見ず、是に於て最後の戦に雌雄を決せんと欲し

固く約して其部署を定め、秀頼公の出馬を促して士氣を奮はし、大に戦ふて敵を撃ち破らんと決心し、先づ進で茶臼山に陣し、中軍の出づるを待つ、時に大野敵の偽計に陥り、秀頼公の出馬を止めければ、計籌全く齟齬し、前軍皆後を顧みて城内異變ありと訛傳く、軍氣大に阻喪するに至れり、左衛佐慨然として大助を召て曰はく、吾が族東軍に在るを以て治長常に我れを疑ひ我か計策を用ひず、今日亦勝算を失せり、我れ今此に死すへしと、汝還て秀頼公に侍し、吾が赤心を告げよとて己に心を決せしかば、大助止りて俱に死せんを請ふ左衛門佐叱して曰はく、汝此所に死せば誰か我が志を明かさん、早く還て秀頼公を守護し、必ず公と死を俱にすへしとて強て返せり、大助涙を拂ひつつ、去て城に還る、是に於て、左衛門佐奮戦縦横、幾たび

か敵軍を破て終に戦死す時に年四十六、

人しれず磨きあげたる玉造り光放ちて世に碎けり 眞琴

城内には秀頼公櫻門に在て胡床に據れり、大助馳せ還て父の遺命を叙ぶ、其語未だ畢らざるに早潰兵大に乱れ入る、又城内敵に應ずる者有て火を放てり、炎焔城内に蔓りて、秀頼公遂に避くる所なく、園莊の倉中に入り玉ふ、大助隨へり諸將諭して曰はく、舊臣すら逃れ出づる者あり、子は客將の子なり、何ぞ必ずしも命を捨つるに及はんや、早く遁れ出づべしと、頻りに勸むれども我が父必ず秀頼公に列せよと命せりとして倉外に藁を籍き食せずして秀頼公を守護すると一晝夜、城終に陥り秀頼公自刃し玉ふを見て即ち自殺す、時に年十六或は十五とも云ふ大助童艸にして能く兵を用ひ、戦功尤も多し、生長の後父祖に劣ら

め名將となるべかりしを、不幸にして茲に至る、誠に惜むべし
 又大助父の命を重んじ、一意秀頼公を守護して殉死す、其の忠
 其の孝父祖に愧じず、彼の舊主を殄滅して子孫の榮を計るの
 徒、蓋ぞ大助を見て慚死せざる、左衛門佐幸村秀頼公を供奉して、大抵此説を取れり是れ決して齊東野人の語として、乘つべからず幸村の大坂に戦死せしこと、數回是指所、影武者なれば、最後茶臼山の戦死も、穴山小助なりしといふ、薩州に眞田の舊跡ありて、地蔵尊を祀れりといひ、又薩州侯の居城に夜間折々來客ありて、兩三の猛士毎に從ひ其の辞するや、侯自ら玄關まで送り出づるを例とせり、其來客は秀頼公なるべく、猛士は眞田後藤等なりし也と云ひ、其女子が某氏に嫁したりと云ひ、木村長門守は一行に後れて落ち行きしとて、予益す其の信憑あるを悦ぶなり、徳川氏の世に成れる史傳筆を托げしもの亦少からざるべし、願はくは識者の教を請はん
 扱左衛門佐の夫人九度山に在て捕へられけるが、救されて歸り、遂に髮を削りて佛門に入り、安房守以下の菩提を訪ひて此地に終りけり、又安房守の息女紀市の方、此の地にて生れ生長

の後妻木彦右衛門に嫁したり、高野山蓮華定院過去帳に龍顔宗白といふ法名あり、慶長十一年七月六日眞田左衛門佐幸村殿建立と記して、俗名を載せず、思ふに像ねて後年を慮りて自ら逆修の位牌を納めしものならん、同院に左衛門佐の遺物兜太刀、書及安房守の太刀并に其筆に成れる豊公の肖像あり、其の他眞田家の書畫等多し、中に尼委の小幅あり、上に和歌及び六字名號を書き、歌に曰みだ頼むこゝろはにしに、百あけの月にね覺のあけばの、空傳へ云ふ自ら其毛髮を絹に織り込みしもの也、傍に源龜子玉川氏と附記す、未だ其事歴を考へず、書筆決して凡ならず○又此の村の大字慈尊院に慈氏寺あり、是れ弘法大師母公の靈隱なり、此の寺の七社明神の神寶に、左衛門佐寄附せし片山一文字の太刀一刃あり
 爾來百餘年を経て、大安上人と云ふ大徳の僧あり、上人諱は戒
 圓、當郷の住人岡久兵衛尉盛重の三男にて、元祿七年に生る、其
 の先は楠家の遺臣岡權守本姓湯淺に出づ、上人幼にして、信佛の心深
 く、高野山に登りて、西生院辨榮阿闍黎あさきに師事して、習學す、阿闍
 黎其凡庸ならざるを見て、大に悦び、撫育薰諭視ると、猶ほ子の
 如く、十五歳にして、剃染と沙彌さみの十戒七十二の威儀等を受け
 戒行堅固、繩錘しんすいを勉め、遂に西院流の傳法を受く、其の山川を跋

涉して無相空寂を觀念し、又檀波羅蜜を行じて慈悲飛走に及ぶ、一時南都に遊で、求聞持法を修し、京洛に留まりて兩部の大法を學ぶ、十九歳にして妙經八軸を講讀し苦學練行凡て十三年、終に内外の秘奥に貫徹す、壯歳にして阿波の龍光寺天滿宮別當職に補し、住すること數年、職を弟子に譲りて故郷に歸り自性院今九度山部落東端の墓地の上に其舊址有に住す、時々遠近を遊行して法を説き利益を施し、其の法雨に浴するもの擧げて數ふべからず、一日大坂難波橋上にて盲人に遇へり、上人之を愍み土砂を加持し光明眞言を唱へ、淨水を以て洗はしむれば忽ちにして明を得たり其他いさ者を起しめ、病者を救ふ等、加持の妙力窺ひ知るべからず、享保十二年春、四國の僧淨空と云ふ者來り謁して曰はく、貧道諸國を巡廻するに、未だ上人の如き大德を見ず、我れ今

一の佛像を建立せんと欲す、願はくは上人功德廣大の靈尊を示し玉へと、上人輒ち大慈大悲六道能化法羅陀山の地藏薩埵を勸む、淨空歡喜して薩埵の石像を造立し、上人に請ふて導師とし、開眼供養を營めり、翌十三年上人先師順盛房の舊室に地藏尊を安置し崇敬最も篤し、一夜夢に遊行して蔚蔚たる森林の中に入りけるに地藏尊影現して告げて曰はく、此の地は淨無碍の地、即ち地藏の淨土也、汝宜しく法羅陀山の善名稱院を建立すべしと感得す、覺めて上人不思議の思をなく、翌日索めて夢に至る所の地に到り、草を分けて入りければ、寶篋印塔一基あり、是れ則ち眞田氏の舊跡にして安房守の墓所、孝子左衛門佐の建る所也、上人益々感喜し、草を刈り樹を伐て地を夷げり、此の時松樹一本を墓側に残す、即ち今の眞田松と稱する

は是れ也、かくて其の地に一字の伽藍を創建し、寛保元年八月十八日本尊を移し奉り、因て法羅陀山善名稱院と號す左衛門佐して後百年餘墓地を捕ひ香花を手向くる者絶えしにより門の兩楹に二句の頌文を書して曰はく、無佛導師應現住處、一切衆生入解脫門と掲げて以て長夜の衆生に示し、朝昏勤行益々勉む、時に上人又夢に安房守の神靈現じて忿怒の相を顯すを感ず、因て神靈を地主大權現と崇め、阿彌陀佛を本地として寺内に勸請せり、一夜又安房守衣冠儼然、手に弓箆を持ち、影現して告げて曰く、上人我れを地主權現と崇む、我れ上人の法施に依り衣食充滿す、其の法酬として永く此に地主となり、此淨土を守護すべしと誓約し玉ひしより、上人愈々崇敬して供養せり、上人又靈告を蒙り、稻荷大明神、金毘羅大權現、天滿天神を勸請し、且舎兒総

左衛門、住吉大神の御影を寄付せしに依り、行せて五社を祀り鎮守とす、社殿今儼然たり、上人其の時の諷誦文に曰はく、我生々世々隨本尊衆生濟度之後、本尊歸正覺位吾亦當至正覺位云々寶曆の末に至て、年來加持せし土砂積て五十石に餘りければ、上人如意寶藏を建立して之を納めんと欲し、自ら勸進の文を書し普く有縁の信施を募りけるに、遠近競ひ來りて淨財を投じ、或は土木を助け、寶藏日ならずして成就す、今土砂堂と稱する是れなり、乃ち土砂を納め、其屋上の寶形に青白二粒の佛舍利を藏め、畫師岡右衛門をして兜卒内院の彌勒慈尊を彩繪せしめ、上人自ら睛眼を点じて本尊とし、衆生に結縁を爲さしむ、弟子等上人の壽像を納めんとを請ふて曰まず、依て右の畫師に命じて寫さしめ、上人自ら點眼す、上人の德輝遠近に耀き

遂に 報聞に達するに至れり、明和年間小野御所の奏請に依
て上人號を 勅許せられ、竹園雲客多く歸信せらる、安永二
年閏三月三日より五日間如意寶藏の供養を執行しけるに、遠
近參拜するもの堵の如く嵯峨御所より御紋附の紫幕及提燈
等御寄付あり、此時の群集當郷前代未聞也、又光勝院宮御紋附
の梵鐘を寄進し玉ひ、朝夕衆生の迷夢を驚覺す、此年仲夏十九
日上人諸弟を集めて遺教し、翌廿日結跏趺坐し、手に密印を結
で入寂す、時に八十歳也、其法化を受けし 縑素聚まり來て悲嘆
すること、婆羅雙樹下の涅槃會もかくやと思ふ計りなりき、さ
て弟子等遺骸を境内に納め、寶塔を築き、其上に廟室を建て奉
仕尤も愍愍なり、即ち今の靈廟是れ也、爾來法燈連錦、中世より
尼僧住寺となり、今猶ほ如律堅固の尼法師法燈を挑び眞田氏

の墓所を守れり、因て住職は眞田の苗字を冒す
眞田氏一德齋より代々智謀を以て稱せらる、而して左衛門佐
に至て、其の智小は物理の極微より大は天下の經畧總べて掌
中に在り、其の仁下は民を愛し臣を撫し、上は忠孝の大道に任
じ、丹誠日月を貫けり、其の勇刀鎗を振ては前に敵なく、百萬の
軍に臨では能く之を奮粉す、實に三德兼備の良將古今獨歩の
俊傑也、其匹之を異域に求むれば唯だ諸葛武侯、本朝に尋ぬれ
ば獨り楠中將あるのみ、但其境遇を異にす、是を以て功業同じ
からず、三將地を易へは皆然らん予眞田氏の遺跡を訪ふて善
名稱院に詣り、圖らずも楠公の位牌を拜して其奇縁に感じ、益
々其の隔世の友たるを信するなり、左衛門佐をして承久正平
の頃に生れしめなば、令聞廣譽の萬世に赫々たるもの有るべ

かりしを、惜い哉大坂危乱の際に會し、其功空しく湮没せしこと、又且つ大坂に在て總督の任に當らしめば恢復の功豈期すべからざらん、哀い哉僅々一方の部將たるに過ぎず、剩へ城中一和せず籌策悉く掣肘せられて躡足を展ばすことを得ず、夫れかゝる位地を甘し碌々の輩と伍することを厭はざりし心中、果して如何、唯だ節に死するの志堅固にして復た他を顧るに違あらざりしなり、誠に左衛門佐は君子と謂ふべし、百世其事蹟を聞く者亦た以て興起するに足らん今の路に當る者若し此公の才智と徳行と節義とあらば邦國復た何の憂かあらん噫斯の君子にして未だ墓碑とてはなし徳川氏の世はいさ知らず今や憚る所なき大御代にして猶ほ思ひの茲に及ぶものなきは残念ならずや安房守は松代侯の世代に入て廟食絶えざれども獨り左衛門佐夫妻及一子大助の祀を奉ずるものなし他日有志を募て墓碑を當院に建立せんと欲す

○當九度山の地は紀伊國伊都郡の中心に位し北は紀の川に瀕し南西二方に丹生川の流を帯び東一方陸地に續く恰も半島の如し戸數慶長の頃は五十戸計りなりしと云ふ今は當郡中第一の多數を占め七八町の街道商店軒を並ぶ旅店中最も舊家にして今に盛大なるは森屋なり通稱森勘とよぶ 皇族方始め貴顯紳士は必ず此屋に立寄宿泊又は休憩あり部落の東一町計に楳の尾神社あり陰森たる樹林の中に在り北に糸の細路といへるあり昔時中將姫の雲雀山へ行きし時通りし路なりと云ふ九度山の名は昔昔九度山の地其由来を尋ぬるに此地の楳尾神社は神代より丹生白鬚兩神の鎮坐し玉ふ所にて昔は有爲が峯(又宇山が峰)と云ひし也然るに弘法大師和泉國楳尾山にて得度し玉ひ常に同山の辨財天を信仰して日々參詣し玉ひしが後高野山を開き玉ふてより毎月九度づ、高野よりかの辨財天に參詣し玉ひける其路に當れる故九度山と名づけしと云ふある時吉野川(紀の川也)漲りて渡るべからず時に辨財天影向して大師に對面し玉ひし聖跡は今に對面石とて一雙の靈石路傍に儼存せるは是なりと云ふ其時より大師有爲が峰に辨財天を勸請して上楳尾山と名づけ玉ふ山の形狀法爾として琵琶は類するも奇と謂ふべし

○又當地より西八町計に慈尊院あり是れ弘法大師母公の靈跡也夫れより町石道傳ひ登ること六十町計にて天野神社に至る又夫れより六十町計山の頂上を備ひ行けば矢立に至り矢立より五十町漸く登れば高野山の大門に至る其間袈裟掛石、捨石、押揚石、鏡石、等の名所あり

○又當地より推田を経て登ること二里計にして神谷辻に出茲にて上方街道に合し登ること一里計にして高野山一心院口女人堂に至る其間四寸岩、極樂橋、不動坂、外の不動、岩不動、兒が池、花折坂、等の名所あり

○又當地より紀の川を渡り西に向へは四里計にして粉河寺あり夫れより二里計を行けば根來寺に至る根來より四里計西南に向て紀三伊寺あり夫れより十町餘り舟にて西へ渡れば和歌の浦なり和歌より北一里に和歌山あり夫れより西三里にして加太浦に至るなり

○又當地より東へ十八町にして學女路村石重丸の舊跡あり又三十町計東清水の邊より北に渡れば橋本驛なり此れより北に向へは紀見峠を越て河内に入り長野驛より瀧車塚大坂に達す其の長野より橋本まで鐵道の全通するも遠きに非ざるべし

明治廿七年四月十一日印刷
明治廿七年四月廿一日發行
明治三十二年四月十日再版
明治三十二年四月十七日發行



和歌山縣平民

著者

井村米太郎

同縣同郡九度山村大字九度山千三百七十四番地書肆

發行者

今川留七

同縣同郡同村大字入郷六百三十二番地

印刷者

守安瀧三郎

同縣同郡同村大字入郷六百三十二番地

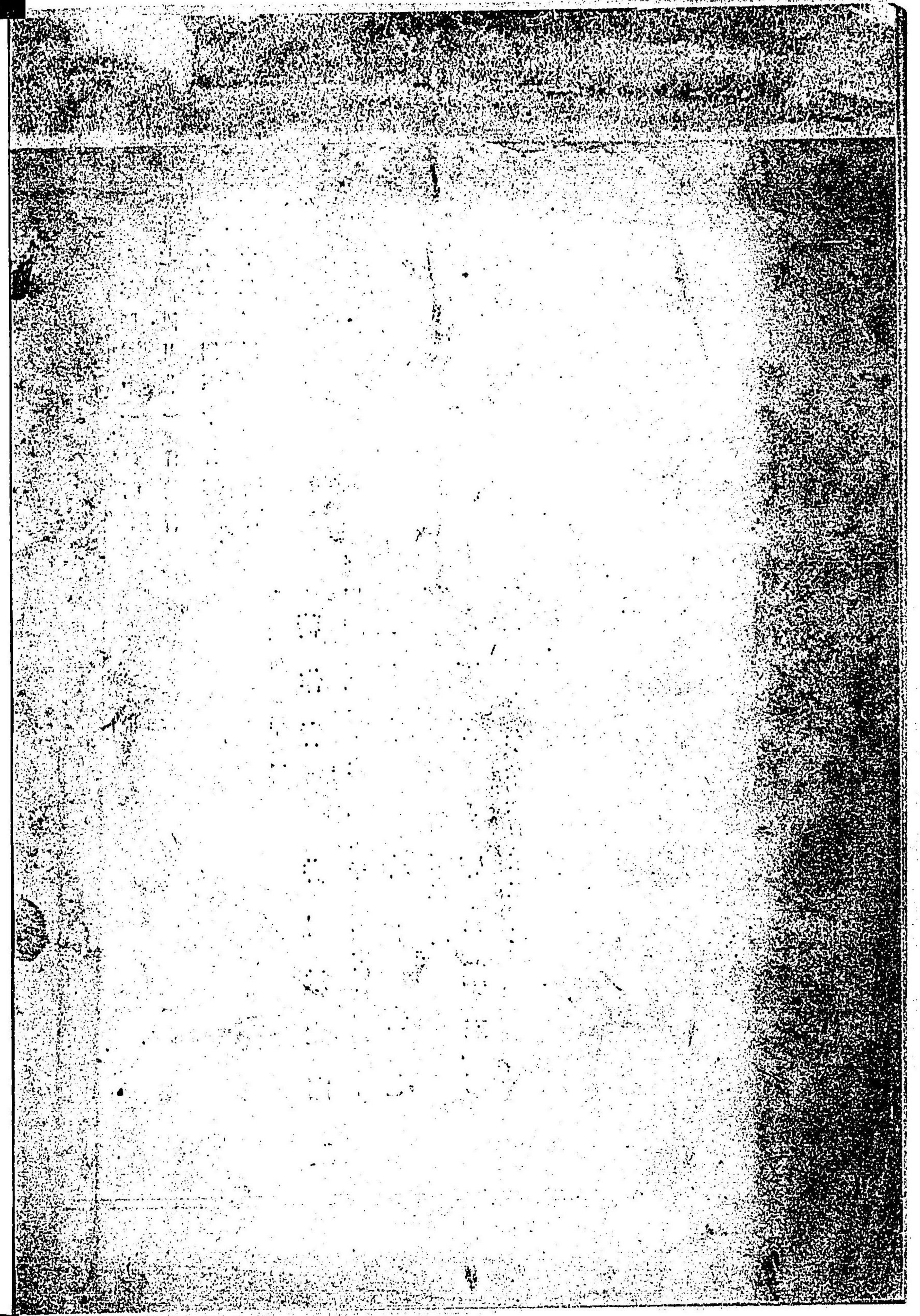
印刷所

博愛社

同縣同郡同村大字九度山千四百十五番地

發行所

善名稱院



Handwritten text on a small white label, partially visible and illegible due to blurring and low contrast.

特52

24

真田の古跡

国立国会図書館

025451-000-1

特52-24

真田の古誌(高野聖九度山)

井村 米太郎/著

M32

ADC-2903

